

## いじめ予防ワクチン（実践プログラム）の開発

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 康哉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024692">https://doi.org/10.14945/00024692</a>

# いじめ予防ワクチン（実践プログラム）の開発

岡本康哉

## Development of Bullying prevention vaccine (Action Program). Kosai Okamoto

キーワード：いじめ予防プログラム 進化心理学 社会心理学 ワクチン

### 1 はじめに

いじめ防止対策推進法（平成25年法律第71号）により、既に法に依る防止対策があり、いじめに関して教育界だけでなく行政全体でも、多くの対策が取られ一定の成果を上げながらも、自死に至る例は現在も続いている。これだけの対応策をもってしても、解決し切れないこの重大な課題に立ち向かう方策として、今までにない視点からの切込みを試みる必要があるのではないだろうか。本研究では、まず、人間には自分とは異質な他者を排撃しようとする心性が、意識化するとしないにかかわらず組み込まれていることを前提とする。そして、あたかもワクチンの接種のように、そうした心性に気づくことで現実場面での他者への排撃行動の抑制につながる「抗体」を子どもたちの意識の中に根付かせることができるのではないかと考える。本稿は、こうした視点から、いじめの防止につながる実践プログラムの開発に向けて試行的に検討した過程について述べるものである。

### 2 研究の背景

一般的に「いじめの気持ちがあなたは心の中にあると思いますか？」と学生に問うと、「あるような気がする」と答える者が多い。翻って、自分自身にもそのような気持ちが心の底にあることは否定しきれない。そのことを、タレントの高橋みなみは、「いじめの種は誰でも持っている。ただそれに水をやるかどうかだ」とNHK TVのいじめ防止の番組で述べている。誰でも持っている“種”，すなわち、時に他者を排撃したいという気持ちは多くの人に分有された根源的な心性であると仮定することは、いくつかの研究領域で言及されている考え方が参考になる。

その1つは、進化心理学の知見である。進化心理学の立場からは、人類の心理面の進化はどのように生じているのか、本能的ともいえる形であたかも生来的に備わっていると見なされる「自動的過程」(Bargh,1994)はどのようなものであるのか、などの問いが重要とされている。一般的に「進化心理学者たちが考える適応とは、彼らが進化的適応環境と呼ぶ、更新世の時代(200万～300万年前から数万程度前)の環境への適応を指す」(森,2014)。種の存続が最大の目標であった当時は、種としてのヒトを存続させるためには、武器を持たない人類は、強力な外敵から身を

守り、あるいは単独では仕留めることが困難な獲物を捕獲するために、集団の力を必要とした。ここでは、集団の合意を破る異質者は排除され、あるいは淘汰されて集団の中から消え去るというメカニズムが働いた。メンバーがてんでバラバラに動いてはヒトとしての集団の維持はおぼつかなかったであろう。この集団維持機能と異質者排除の仕組みは、あたかも現代の学校社会において、既成の集団の秩序を破る異質者を「菌」呼ばわりしたり、空気の読めない者として排除しようとするいじめの仕組みと共通の構造を持っているように思われる。

また、進化心理学の立場からは、怒りなど激しい否定的感情の爆発は、個人の性格特性の問題ではなく、安全と安心の妨げとなる他者の存在など外的状況を攻撃行動によって破壊しようとする生存にとって意味ある行動であると解釈される。生を脅かす外敵への強い怒りや恐怖など否定的感情の即座の発動とそれに伴う危険回避行動が生じなければ、そもそも生存する確率は非常に低くなり、結果として、危機状態に対して強い否定的感情が随伴する仕組みを人類は進化の過程で備えてきたと考えられる。

このように、集団維持のために、あるいは自身の安全と安心の確保のために外敵と見なす相手を排撃しようとする行動は、現代の人々の、さらには子どもの意識の中にも生来的に存在していると考えることが可能であろう。

2つ目は、社会心理学の知見である。中でも、他者の存在によって人々の行動が影響を受け、同時に自身の行動が周囲の他者に様々な形で影響を与えるという対人相互作用や相互被影響性の考え方は、一見個人内で完結していると受け止められがちな個人の意識や行動が、その実周囲の他者との関係性のありようやそれまでに経験してきた他者との相互作用のパターンによって規定されているということを感じさせる。たとえば、目の前で暴行されていることを知りながら目撃者の誰もが警察に通報しなかったとされる「キティ・ジェノブーズ事件」は、目撃者が多数存在していることを認識していることにより、目撃者が少数であった場合に本来誰もが起こすであろう援助行動が抑制されてしまうことを明らかにした点で社会心理学上の重要な発見となった。

他者の存在及び他者との関係性の性質が本人が自覚する以上に個人の行動に大きな影響を与えているという社会心理学の知見からは、望ましくない行動であることを理解しながらも、他者に対していじめ行動を表出してしまう場合があるという、学校教育現場でしばしば観察されてきた教師にとって了解しがたい児童生徒の行動の背景を考察する上で重要な手がかりとなる。

本研究では、こうした心理学領域の知見に加えて、「ワクチン」という発想をいじめ防止プログラムを開発する際の基本的な考え方として設定したい。

「ワクチン」とは感染症の予防接種に使用する薬液のことを指し、細菌やウイルスに感染すると体内にその病原体に対する抵抗力が生まれるという原理を応用したのがワクチンによる予防接種である。病原体の毒性を弱めたり、無毒化したものがワクチンであり、ワクチンを接種することで、「実際には病気にかからなくてもその病気への免疫ができ、病原体が体内に侵入しても発症を予防したり、症状を軽度ですませたりすることができる。」(ファイザー, 2017) “病原体”を無毒化・弱毒化してあらかじめ生体内に植え付けることで“発症を予防もしくは軽度化する”という考え方は、学校におけるいじめの防止を考える上できわめて示唆に富んでいる。

進化心理学の知見からは、自身の安全と安心の確保のために他者を排撃しようとする傾向は人類の進化の過程の中で生来的に備わっているという示唆が得られた。このことは、集団生活を続ける中では、子ども同士の間で他者を嫌ったり、排除したり、ときにいじめにつながる行為を起こす可能性がもともと存在していることを認めることが重要であることを意味する。単にいじめは許されない行為であることを子どもに伝え、指導するだけでは、いじめ行為の発信源である他者への差別意識や優越感を持つようとする本来的な傾向を消し去ることはできないであろう。

また、社会心理学の知見からは、人間の意識や行動は他者との関係性の中で影響されることが示唆され、いじめが持続する背景に集団への同調や自分自身をいじめ—いじめられの関係とは無縁の世界に位置付けて自分の立場を守ろうとする行動傾向が備わっていることを前提としていじめの問題を考えることが有益であることが示唆される。

このような視点からいじめをとらえようとする際には、他者を排除して自分の安全を守ろうとしたり、自分の立場を守るために強い勢力を持つ子どもの行為に同調したり、無関係であろうとする傾向が子どもの中にもともと存在することを前提とすることが有効であろう。そのように考えること自体を否定するのではなく、むしろそうした感情や認知、行動傾向が心の中に自然に存在していることを子どもたちに気づかせるような機会を設け、「ワクチン接種」というところの原因を無毒化・弱毒化して抗体をつくるという考え方は一考に値すると思われる。

### 3 “いじめ予防ワクチンプログラム”の構成

本研究で開発を目指すいじめ防止を目指すプログラムの構成は、以下のような視点から組み立てられている。

#### 1 進化心理学的な視点から(「自動的過程」)

第一の視点として、進化心理学的な見地を活用することである。

進化心理学の考え方によれば、言わば本能的に備わっている反応(「自動的過程」として「狩猟採集時代」のレベルだと言われている集団維持機能(種の存続維持機能)とその結果としての排他性(「菌呼ばわり」「空気の読めない者の排除」)が注目される。他者の排撃が個々の内的特性ではなく、ヒトが進化の過程で獲得した、その意味でだれもが備えている心性であると見なし、それを自覚させることである。つまり、いじめを生み出す背景には、ヒトとして避けられない自然な心のあり様が関係していることを知ることが本プログラムの出発点として位置付けられる。

#### 2 社会心理学的な視点から(「対人行動」)

第二の視点として、社会心理学的な見地を導入する。他者の存在で人の行動がいかに関与を受けるか、また、本人も他者にいかに関与を与えているかについての視点を本プログラムの中に組み入れることとする。人の行動の陥りやすい点を認識することが中心的な位置を占める。例えば、多くの人が目撃しているからこそ誰も関与しようとしな例や、人をジャンルに当てはめて、ステレオタイプに判断しがちな例、対人関係の安定を保とうとするバランス理論、同調圧力、様子見の心理メカニズムなどが教材として活用できるであろう。

#### 3 両者の視点から

「自動的過程」が自と他の行動の相互被影響性と結びつくことで、様々な差別(人種…)が、そうすべきではないことを理解しつつも結果として避けられない社会的事実として生み出されてきたと考えられることから、本プログラムの中になぜ人は差別をしてしまうのかを考えさせる機会を設定することとする。

4 上記の、1 進化心理学的な視点(「自動的過程」)及び2 社会心理学的な視点(「対人行動」)の二つの視点から、人間には自分とは異質な他者を排撃しようとする心性が、意識化するとしないにかかわらず組み込まれていることを認識し、これはあたかもワクチンの接種のように、そうした心性に気づくことを目指した。次に、現実場面での他者への排撃行動の抑制につながる「抗体」を子どもたちの意識の中に根付かせる過程は、統制的過程として以下の様に①及び②として展開する。

##### 統制的過程 ①

「罰や法について考える」

「自動的過程」の負の部分(社会集団で制約するために、人類は「法」という民主的な手段で統制を図ろうとして来た。いじめ問題に関して言えば、「いじめ防止対策推進法」という法的な枠組みが整えられた。いじめは、恐喝罪、暴行罪、傷害罪、強要罪等の法に触れているケースもあり、また実際に裁判に訴えられる場合も少なくないことから、子どもたちには法をし

っかり認識することの必要性を本プログラムに組み込むことが有効であろう。

しかし、時に「ルールや罰」は勝手に作られ、集団維持機能というメカニズムが利用されることで、日常的に「罰ゲーム」という位置づけで存在し、いじめ発生の原因作りともなっている両面性も考察する。

### 統制的過程 ②

「人間としてどうするか考える」

人間は自動的過程の存在に心の中で気づきながらも、統制的過程を心に築かなくては生きていけない。

では、人はどう生きていかななくてはならないか？ここからが、子どもたちが自らの心に問いかけながら答えを探していくこととなる。個人で、道徳で、学級で、生徒会で、仲間同士で、大人と・・・常に考えていことその姿勢こそ、いじめ問題だけでなく、気が付けば、もっと大きな問題を大人も巻き込んで人類の課題として取り組むことにも発展する。以上のような内容を基本として構成していくこととした。以下にその主要部を表すこととする。

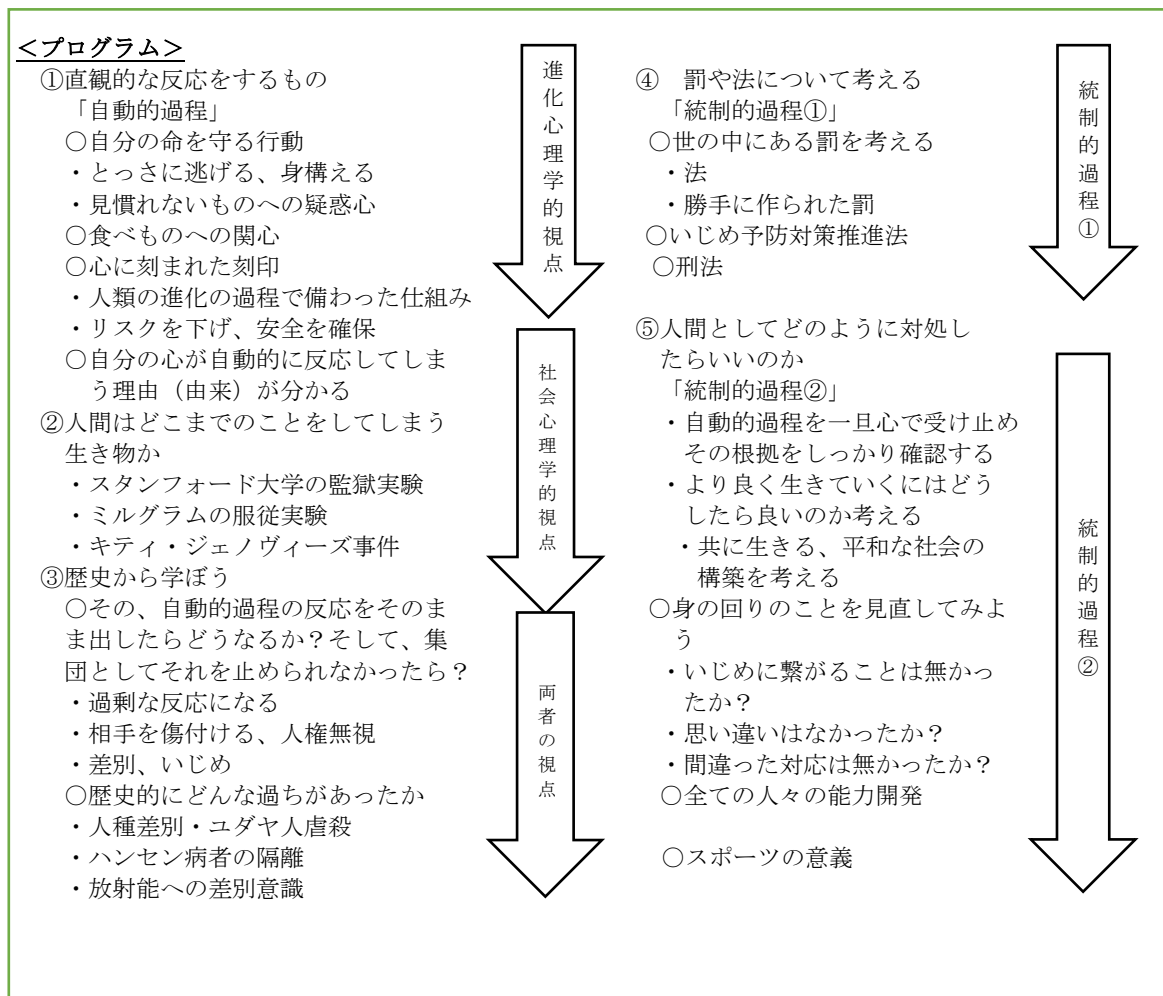


図1 いじめ防止ワクチンプログラムの構成

## 4 プログラム「いじめ予防ワクチン接種」授業案

### (1) 「直観的な反応」

表1 (進化心理学の視点に基づいた指導案)

段階	指導者の指示	子どもの動き	留意点
はじめ	何も考える間もなく反応することについて考えて見よう <例えば、怖いものに会ったら？> このように、自然に心が反応することについて、まとめたものを発表する。	直ぐに身構えるよ 他者の考えを知る	考える間もないことを確認し、優れた人間の動きだと知る

個人的思考	気付いたことを個人個人でノートにまとめる。		静かに思考させる
展開	全体のを大きく括る ○自分の身を危険から守る行動 ・とっさに逃げる ・見慣れないもの、生き物への警戒 ・感染への警戒 ・怪しいものを食べたら吐出す ○集団維持の行動 ・集団を作ろうとする ・気に入らない人を避けようとする	個人の意見を発表する  人間というより生き物としての行動と気づく	子どもの意見を教師がまとめる形をとる  感染への警戒（菌）という捉え方にも触れる
考察	○気付いたことはないか？  ○誰でもこのような気持ちを持っているか？	心の中にこんな気持ちがあることが否定できない	大切な働きであることを確認  自動過程（種のような存在）
まとめ	どこからこのような気持ちが生じるのだろうか？ 人類進化の過程で備わった仕組みについて解説する	自分の心が自動的に反応してしまう由来が分かる	進化心理学の知見から（狩猟時代の生き方が刷り込まれている）
予告	次時は、このことが人類の歴史に何を残したか知ろう		歴史から学ぶことで、人類一般の問題であることに思いを馳せる

ダマシオ（1994）が提唱した考え方で「日常生活の中で、様々な判断や選択に迫られるが、その際に悪い結果が予見されると、合理的な推論に従って直感的な警戒信号が発せられる。これがソマティック・マーカー（身体標識）である。」直観に基づく判断（自動的過程）が正しい選択を導く可能性が強調されている。

また、戸田正直（1992）は感情アーチ理論を提唱している。これは「感情は進化の過程で獲得した生存のための心的ソフトウェアで、アーチとは、人間を駆り立てる力のことで、この力が存在することにより、人間は周辺環境の状況に応じた適応的な行動を選択できる。たとえば、恐れは対抗不能な脅威が出現した状況で発動され、恐れが生じた人間はその脅威から逃げる行動をとろうとする衝動的な傾向を持つという。」「ただし、ここで仮定される周辺環境とは、かつて私たちの祖先が草原に住んで居た頃の野生環境で、現代の文明環境とは様相を異にしている。従って、野生環境においては合理性を持つ感情の機能が文明環境では非合理的な行動を導く場合がある。」（森、2015）どちらも、瞬時に我が身を守る、必要行動であり、人類が生き延びるために「進化」の過程で備わった力と言えるだろう。

では、ソマティック・マーカーとは、どんなものが考えられるだろうか。私は以下のことを例として挙げてみたい。①「伝染」を疑われる何らかの兆候として捉えること。⇒<放射能と聞いただ

けで「菌」と連想してしまう> ②「風貌の違いがあり威圧感を持つ」者の行動。⇒<一見近寄りた雰囲気的人物には多分そばに行かない> ③「集団の意思」を無視した勝手な言動等。⇒<自分も同じ仲間だと思われぬように距離をとる> これらは、即座に「我が身の安全」脅かすものとして、直感的な警戒信号を受け取っていると考える。まずは、「近づいてはいけない」⇒「避ける」という自動的な反応である。この最初に感じる、まさに「直観」は確かに「安全が確認できない限り取り得る最善策」であろう。

しかし、上記にもあるように、これは「野生環境で合理性をもつ」ものであるため、文明環境では、「差別」とも受け取られる行為と見られる可能性がある。

二過程モデルという、人間の心の動きを「自動的過程」と「統制的過程」の二つによって説明する考え方によれば、直観という自動的過程から思考という統制的過程へ速やかに橋渡しできれば、それが、例えば「差別」であることに即座に思い付くであろう。直観として感じることは否定出来ないが、それをそのまま表出することは文明環境では適切でないことになる。「感じることは罪でないが、表出すれば罪」にもなるということもある。ここが、とても難しいことである。否定できない心がありながら、それを否定してこそ、「平和な社会」が作れるからである。

この感情は何なのか？ 「今、自動的過程（直観）が働いているな！」と捉えることであろう。

## （2）「人はどこまでのことをしてしまう生き物か」

表2（社会心理学的視点に基づく指導案）

段階	指導者の指示	子どもの動き	留意点
はじめ	人は優しい面と怖い面を持っているな？ 自分の内面はどうか？	日常から答える	個人的に考えさせる

個人的思考	怖い面ではどんなことが上げられるか？	社会でのニュースから答えるであろう	
展開 1	スタンフォード大学の監獄実験について知る ・役割を持つと、それにふさわしいように人は振る舞うものである。 ・そして、自分でも思ってもみないほどの行為に走ることもある。	個人の意見を書き留める ↓ 共有する	解説の資料を用意したい
展開 2	ミルグラムの服従実験について知る ・権限が与えられると、誰でも思ってもみないほど残忍になれるものである	個人の意見を書き留める ↓ 共有する	
展開 3	キティ・ジェノビーズ事件 皆見ているので誰も助けけない	個人の意見を書き留める ↓ 共有する	傍観者の罪を考えさせる
まとめ	誰でも状況により、自分ではありえないと考えられる行動をする可能性を知る	まとめをノートに書く	心の中にある危険として認知できれば良い

「権力への服従」とは、一定の権力がある人物の指示の下では、普通の人でも「かなりのこと」をしてしまう可能性があることを示唆している。それは、あなたが冷淡であるからでも何でもなく、そのような状況下であれば、だれでも手を下してしまう可能性を持っていることを示している。以前、集団で特定の子どもを追い詰め、裸で泳がせ、殺してしまう少年事件（川崎市,2015）があった。自分はそんなことは決してしないだろうという思いは、覆る可能性があることを、「自覚」することが重要なねらいである。

そして、傍観者もいじめには常にいる存在と言ってもいいだろう。多分、多くの子ども達はこの取り巻きの役割を演じることになるだろう。この役目は「無実」と考えるだろうか？冷淡ということでもなく、ただ多くの人が見ているという状況が「見殺し」を生む環境を作っていると認識する。これは、私たちが見守ることで責任が分散し、だれも責任がないと思いがちで、皆で犯してしまう「罪」である。これは、傍観者効果だと認識しなければならない。この認識を確認するという意味付けをもった授業である。

### (3)「歴史から学ぼう」

表 3 (進化心理学及び社会心理学の視点に基づく指導案)

段階	指導者の指示	子どもの動き	留意点
はじめ	思ったことをそのまま行動したらどうなるだろう？	心で思い巡らす	静かに思考させる
個人的思考	気付いたことを個人個人でノートにまとめる。		良いことも大切に
展開	分類しながらまとめる  マイナス面に注目させる	個人の意見を発表する ○人知れず行う善行 ○自分の身を守る行動 ・相手を傷付けるかも ○犯罪的なこと ○その他 ・悪口	子どもの意見を教師がまとめる形をとる
考察	歴史的にはどんなことが起きただろう		歴史の教科書参照
まとめ	・大量殺戮・人種差別 ・ユダヤ人の迫害 ・ハンセン病患者の隔離 ・放射能への差別意識 ・いじめ（菌よばわり）	歴史的に重大な過ちだったことを知る	様々な角度からの意見を集約する
予告	次時は、このことが起こらないようにするにはどうしたら良いかを考える		動物との根本的な違いを考えよう

人は平和を唱えながらも、なぜ核兵器を作るのか？戦争や紛争はなぜ無くならないのか？様々な人類が抱える矛盾を受け止める。

そして、このような排他性が人類にどのような禍根を残したか？様々な差別（人種差別、ユダヤ

人虐殺、国籍による差別、ハンセン氏病患者隔離、その他）が事実としてあったことを認識する。そして、「心に思うこと」と、「する」ことの距離の大切さを感じさせたい。

#### (4) 「罰や法について考える」

表4 (統制的過程①を組み入れた指導案)

段階	指導者の指示	子どもの動き	留意点
はじめ	どんな時「罰」をもらったことがある？	日常で答える	
個人的思考	世の中にある罰をまとめてみよう	発表する	
展開1	<分類する> ○法に依る罰 ・法律を破っての懲役・罰金 ○道路交通のルールと罰 ○スポーツのペナルティ ○勝手に作られた罰 ・遊び上の罰 ・集団での罰	日常的なルールから法に至るまで様々なものがあることを実感する	罰ゲームという発想が気軽になされることに注目させる
展開2	なぜ罰が出来るのだろうか  いじめ防止対策推進法を紹介する	個人の意見を発表する  どうしても必要なことは法律となる  刑法にも触れる	行動修正戦略について触れる  第4条に注目させる <いじめの禁止>
まとめ	罰は強制力を伴う 相手を従属的にさせる	勝手に作られる罰は無いか点検する	勝手に作られた罰でも、本人が自分が悪かったと理解することがある
まとめ		まとめをノートに書く	

罰という考え方は、余りにも一般的で疑問の余地が無いように思われる。間違っただけをすれば罰（ペナルティ）である。スポーツの世界ではペナルティの無いゲームは考えられない。最も紳士的で自主性の重んじられているスポーツの一つにラグビーがある。やはり細かい決まりがあり、ペナルティがある。ゴルフでもそうである。集団生活でも、決まりとペナルティは付き物である。公的な決め事（法律等）に違反すれば罰則がある。だから、決まりを破れば「罰」という考え方が自然と発動される。授業に遅刻した⇒「しばらく立っていなさい。」 忘れ物をした人がいた⇒「罰清掃をやってきなさい。」 リレーで一番遅かった⇒「そのチームは腕立て伏せ10回だ。」といった具合である。罰は、一般的には「行動修正戦略」（中尾、2015）と解される。相手の行動を修正させる機能を持つものだが、中には修正を求めないで「追い出す」といことで罰にはならないやり方も報告されている。

「ヒトには、同じようになるために、つまり、同調するためだけに集団内の他者を模倣する傾向もあります。協力への合意にもとづく社会規範である同調を、集団内の他者に求めさせます。そこで行われる同調の要請は、同調しなかった者に対するさまざまな罰や制裁がありうることによって後押しされます。」（北村・大坪,2012）つまり、集団規範維持のための罰行動は「利他的罰」と呼ばれ、集団規範・高い協力率の維持に役立つと考えられるからである。

さて、村内のルールを守らないものへの「村八分」という罰があった。見せしめ的な効果があったとも思われる。「ルールを守らないと、あななのだ！」という無言の警告である。

また、明確に公共の秩序の維持のためのルールに基づくものではないにも関わらず、罰が設定されたものである。勝手でも何でも、ルール（掟）を集団が作ることで、いとも簡単に「罰」の必要性が論じられ、被害者にもかかわらず、その罪を償おうとする。軽く見過ごされがちであるが、このタイプの問題はないだろうか。実は、この発想も怖いと考えられる。習慣化もするだろうし、何よりも大人が体罰としてやっている可能性がある。本当にそれは「罰」が必要なのか？多分不要なこと、あるいは避けられることが出来ると考えられる。それぞれの子どもには能力の限界があり、様々な環境の違いがあるにも拘わらずに「罰」で行動修正を図っていく。この手法が「いじめ」に繋がると捉えられないだろうか。

ここで、いじめの定義を改めて掲げてみたい。いじめ防止対策推進法の施行に伴い、平成25年度から以下のとおり定義されている。【「いじめ」とは、「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの」

とする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない【

また、「それは、加害者の意図に関係なくいじめと認知できるからであり、仮に善意による行為であっても、被害者が苦痛を感じたことを出発点に様々な対応が可能となる。」(伊田,2017,4)

ということを考えれば、十分に当てはまることである。軽々しく「罰ゲーム」等と言っていないだろうか。

また、『時として、本来非難されるべきでない被害者や犠牲者の欠点を探し出して「不幸に見舞われても仕方ない」「事件に巻き込まれたのは自業自得だ」と考えることによって、信念(公正世界仮説:良いことをすれば良いことが、悪いことをすれば悪いことが起こるはずだ)を維持する傾向がある』(森,2015)といわれる。つまり、友達を失えば、失う理由があるはずだ。いじめられればその被害者にもそれなりの理由があるはずだ。という考えによっても、さらに追い込まれることになる。

さて、教育新聞(2017,2,16)から考えてみる。「被害者も悪い 3割という実態」についての捉え方である。この記事の筆者は「道徳に時間などで徹底討論」「考え、議論する道徳」に解決を求めている。従って、その回答の一つに、この「実践プログラム」を考えることは出来ないだろうか?なぜなら、その心の中にある種(たね)のような思いに気付く、その思いの由来が分かることから組み立てられているからである。ぜひ、このネガティブな思いを見つめることから、いじめへ予防への「抗体」を作り上げたい。「実は被害

者も悪い」と本当に思っているのは、いじめ対策は当然、空虚なものにしかならないからである。

中学校時代に不登校だったが現在は高校生活を充実させている生徒さんとお話する機会があった。そこでのお話で印象的だったのは「自分への罪悪感があった」と言う言葉である。登校できない自分を責めているのである。具体的にどのような時にそのように感じるかを問うたら「みんなが学校にいる時間帯に家にいることや、親が良かれと思って外に連れ出してくれた時」と言われた。「後ろめたさ」と言うものであろうか。

なお、不登校だった生徒が感じる「自分を責める」思い、つまり「自虐性」について考えてみたいが、対極にあるのが「攻撃性」ではないだろうか。「全能外され憤怒」(内藤:2009)から生じる他者への攻撃性は相手が「自虐性」を持つことで二倍に強まるように感じる。先ほどの不登校の子どもをもつ親の会の方の言葉では「解決してからが大切」と言われた。つまり、被害者側は「チクった」として「卑怯者」にされ、自らも自らを「卑怯者」として認知してさらなる「自虐」へ入る。加害者側はさらに「攻撃性」を強めるが、それは水面下で行われることになり、事態は深刻になることがあるというものである。

現代の疾病には「自らを守る働きが免疫力が過剰に働き自分を攻撃する」「自己免疫疾患」という病がある。守るべき自分が自分を攻撃するという、正に現代的なものだ。いわゆる「難病」と呼ばれるものもこの中にある。まさに、自虐とは精神的な自己免疫疾患かも知れない。

現代的課題として、医学でも取り組んでいるように、精神的な面からも、積極的に考えて行きたい課題である。

## (5)「人間として」

表5 統制的過程②を組み入れた指導案

段階	指導者の指示	子どもの動き	留意点
はじめ	人間としてどのように対応したらいいであろう	今までの授業を振り返って考える	
個人的思考	気付いたことを個人個人でノートにまとめる。		静かに思考させる
展開	発表を教師がまとめる ○その反応を一旦心で受け止める ○この気持ちが湧き出る由来を受け止める ○平和でなければ全てを失うことを考える	個人の意見を発表する	小グループにしても良い
考察	身の回りのことを考えよう ○いじめに繋がることはなかったか? ○勝手な思い込みは無かったか? ○差別的な対応で無かったか? ○被害者の思いはどんなだろうか?	身近な問題として捉える <個人⇒発表>	
まとめ	安心・安全な社会をつくるためにそれぞれの立場から考える ○家庭に持ち帰って家族でも話し合うことを勧める		子どもとして 教師として 保護者として
発展	スポーツの意義について触れる	積極的に自動的処理に対処していく方法としてスポーツ競技という方法を知る	



人は自然界の生き物としての「ヒト」という側面を根源的に持ちながら、人間としての集団を形成している。人は生物である以上「ヒト」としての本能的な欲求を持っているであろう。しかし、人間社会で生きていくためには、その欲求をコントロールしなくてはならないことを学んでいく。言わば「ヒト」から「人」になっていくものと考えられる。子育てや教育とはこの役目を果たすべく求められる社会の仕組みであろう。しかしながら、我々は根源的などころで「ヒト」であることや「生物」として生きていること逃れることはできない。この点が子育てや教育上の複雑な課題でもあり、十分な時間をとって、個人内の対話や小集団、教室全体での話し合いを行う機会を設けることが望ましい。

さて、人類は地球上に生を受け36億年の歴史をもっている。狩猟生活も長く過ごしてきた。これら一連の過程も人類の進化の過程であり経験していかなければならないと考える。例えば、これは「遊び」という形で体験することで獲得していくのかも知れない。何故遊びが大切かの一つの理由に、進化の過程を踏ませる意味だと捉えられよう。身体全体を使って走る、追いかける、登る……そして、動植物を相手に取ったり捕まえたりすること……そして、仲間を作り徒党を組んで役割分担をして活動すること……このような活動は狩猟が必要だったことではないだろうか。

そして、力の強さを示し、競い合うことも「ヒト」として根源に持っていると考えれば、これは、「スポーツ」という形で上手く世の中に組み入れられてきたと考えられる。相手を倒すこと、一番になろうとするのは「種(しゅ)の保存」からの必要行動であった。したがって、スポーツ競技は安全性を担保した上で模擬の「戦い」をするのである。だから、勝ち負けにこだわっても良いと考えられる。自動的過程が生じる心の動きも肯定的に捉える必要がある。

## 5 考察

どんなことでも実践に当たり、スローガンレベルの言葉がある。例えば、「男も育児休業を取ろう！」だったとする。⇒これを第一レベルとする。しかし、「出来るだけ休みは取りたくない。懸命に働くのが良い」という雰囲気が職場内に蔓延しているとすれば休みは取りにくい。⇒これを第二レベルとする。そして「もともと、女性が育

児、男は仕事だろう。」という価値観を男が持っているとする。⇒これを第三レベルとする。実は第三レベルが心の奥底に潜んでいれば、口先だけスローガンを唱えるが、本気度はかなり低いと言わざるを得ない。

しかし、スローガンは正論なので、正面切って反論するわけでもない。(原田、2017)

これを、いじめのレベルで考えてみたい。

第一レベル⇒「いじめはいけない」「いじめを根絶しよう！」

第二レベル⇒「そんなこと言っただって、困ることがある」「こっちも迷惑しているよ」

第三レベル⇒「集団維持のためには、場にそぐわない者は排除されてこそ集団は維持できる」「損失分を皆で負担しなければならぬ」「淘汰の機能が働いて進化していく」

このような、意識であろうか。実は、第二レベルのモヤモヤした思いがあれば「そうは言っても……」と陰で言っていることはないだろうか？さらに、第三レベルに関する事を考えている人もいるかも知れない。「そもそも、生き物であるヒトとして考えることを避けていないか」という主張である。「きれいごとばかり言っているなよ」という言い方もあるかも知れない。このような状況でも、第一レベルは「正論」であり誰も反論できないので、スローガンは声高に響き渡るであろう。しかし、モヤモヤレベルの気持ちが背後にあったり、そもそも論が首をもたげたりする。一向に事態の改善が本気では進まない可能性を残している。時に、本気で第三レベルを主張するのが正直とばかり、英雄気取りに無鉄砲な行為に出てくる者がいる。相模原市やまゆり園の事件(2016, 7)がそう想起させる。

つまり、人とはどんな生き物かを教授する側もしっかり分かっているこそ、いじめ予防の方策も明確になる。

明らかなのは、他の生き物は「本能の命ずるままに生きるのが理にかなった生き方」であるのに対して、人は「本能に従って生きては人として生きられない」ということであろう。

そこで、本実践プログラムのような対応により、教育活動全般を通して、「ヒト⇒人」への導きがなされていくことが必要であると考えられる。

## <文献>

- ファイザー 2017 おとなの感染球菌感染症 (<http://otona-haienkyukin.jp/vaccine/>)  
原田順子 2017 「国際経営」放送大学教育振興会  
藤田和生 2014 「比較行動学」放送大学教育振興会  
伊田勝憲 2017 「指導主事 新時代」日本教育新聞  
五百部裕・小田亮 2014 「心と行動の進化を探る」朝倉書店  
石丸昌彦・広瀬宏之 2016 「精神医学特論」放送大学教育振興会  
ジェームズ・ペネベイカー 2014 「代名詞の秘密」日本語 TED 新着:

北村英哉・大坪庸介 2012 「進化と感情から解き明かす社会心理学」有斐閣アルマ  
 小松正 2016 「いじめは生存戦略だった!？」秀和システム  
 栗田季佳 2015 「見えない偏見の科学」京都大学学術出版会  
 教育新聞 2017 「被害者も悪い 3割という実態」  
 マイケル・トマセロ 2014 「ヒトはなぜ協力するのか」勁草書房  
 道又薙・岡田隆 2015 「認知神経科学」放送大学教育振興会  
 文部科学省 2013 「いじめの定義」  
 森津太子 2014 「社会心理学」放送大学教育振興会  
 森津太子 2015 「現代社会心理学特論」放送大学教育振興協会  
 内藤朝雄 2007 「<いじめ学>の時代」柏書房  
 内藤朝雄 2015 「いじめの社会理論」柏書房  
 内藤朝雄 2017 「いじめの構造」講談社現代心理学  
 中尾央 2015 「人間進化の科学哲学」名古屋大学出版会  
 NHKテレビ 2016 「ダーウィンが来た」  
 NHK スペシャル 2017 「人工知能 天使か悪魔か」  
 ロバート・B・チャルディーニ 2017 「影響力の武器」誠信書房  
 静岡新聞 2016 「原発避難小4に「菌」」  
 静岡新聞 2017・2・8 「震災いじめ 国が明記」  
 静岡新聞 2017 「震災いじめ 国が明記」  
 住田正樹・田中理絵 2015 「人間発達論特論」放送大学教育振興会  
 鈴木光太郎 2013 「ヒトの心はどう進化したのか」ちくま新書  
 内堀基光 2012 「ひと学への招待」放送大学教育振興会  
 内田良 2014 「いじめゼロ」宣言は、いじめを温存する——「虐待ゼロ」「体罰ゼロ」教育の世界にあふれるゼロ信仰 「ヤフーニュース」  
 Wikipedia からの語句解説 「スタンフォード大学の監獄実験」「ミルグラムの服従実験」「キティ・ジェ  
 ノビーズ事件」「刑事事件」  
 ユキ・サマルカンド 2004 「黒豹たちの教室」星の環会